

平成 21年4月13日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007-2008

課題番号：19520656

研究課題名 (和文) 東アジア後期旧石器時代における居住類型の国際比較

研究課題名 (英文) International comparison of settlement patterns in the Late Palaeolithic of East Asia.

研究代表者 小野 昭 (ONO Akira)

首都大学東京 大学院人文科学研究科 教授

研究者番号 70000502

研究成果の概要：

後期旧石器時代の人類の居住あり方を典型的に把握し、国際比較をおこなうことを目的とした。そのために、2007年度には中国、ロシア、北米から、2008年度にはドイツから第一線で活躍する研究者を招聘して国際シンポジウムを開き、さまざまな居住のありかたの報告を受け、年代論とあわせて討議をおこなった。代表者が調査している新潟県小千谷市真人原遺跡の事例の分析を併行して実施し、信濃川中流域のこの遺跡の居住類型を、線形飛び石状の回帰モデルとして理解できる可能性を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：東アジア、後期旧石器時代、居住類型、真人原遺跡、珪質頁岩、黒曜石、ホモ・サピエンス、比較論

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請時における動機と背景：代表者は信濃川中流域を主なフィールドとして、長年にわたる継続的な発掘調査を、第四紀地質学県連の調査とともに新潟県小千谷市真人原(まっとばら)遺跡で実施し、実証的に居住のあり方を解明してきた。その成果は日本国内だけでなく、国際会議においても逐次報告

し、日本列島の黒曜石、珪質頁岩の産地分析と結合させた居住のパターンをについて成果を発信してきた。

(2) 海外研究者との連携：中国・古脊椎動物古人類研究所副所長の高星教授、韓国・木浦大学李憲宗教授、ロシア・極東国立総合大学 A. Kuznetsov 教授、ドイツ・テュービンゲン大学 N. Conard 教授、同ローマゲルマン中

央博物館 O. Joeris 博士とは緊密な連絡をとり、本プロジェクトのためのシンポジウムに参加し、報告と討議に貢献してもらった段取りを済ませて臨んだ。

2. 研究の目的

日本列島における後期旧石器時代の遺跡の調査は、その数、規模、精度の全ての点でいまや膨大な蓄積を有し、東アジアの地域全体のなかでも突出している。石器の原産地分析をふまえた集団の居住類型を比較し、日本、韓国、中国、ロシアの事例と成果を国際的な枠組みで比較することを目的とした。あわせて東アジアの後期旧石器時代の研究方法の共通性と差異性もあわせて明らかにすることを予定した

後期旧石器時代の人類集団の環境への適応、小河川流域に沿った居住の形態、石材の調達形態、編年など、基本的な項目をみても日本、韓国、中国、ロシア間では解明の状態はむろん均一ではない。申請者はまず現状を踏まえることがなによりも重要と考え、後期旧石器時代を対象とした各国の環境解析の現状を前提に居住の類型を、調査が進捗している地域を基にある程度一般化して、相互に報告する中で成果と課題を明確にすることを課題とした。

3. 研究の方法

(1) シンポジウムを開催し、日本列島以外の地域の在りようの報告を受け、議論した。2007年度のシンポジウム(つくば市産業技術総合研究所)では以下の報告を受けと討論した。GAO Xing(China): A Behavioral Model for Human Evolution in Pleistocene, China./ Anatoly KUZNETSOV(Russia): Environmental changes during OIS3 and OIS2 and the origin of microblade industries in North-East Asia./ Christopher J. NORTON

(USA): Taphonomic perspectives on the Japanese Paleolithic during the OIS 3-2 transition. 2008年度のシンポジウム(首都大学東京)においては次の報告を受け討論をおこなった。Nicholas J. CONARD (Germany): Current research on the late Middle Paleolithic and early Upper Paleolithic of the Swabian Jura. / Olaf Jöris (Germany): The impact of an U/Th-Hulu-based radiocarbon age calibration on the OIS 3 archaeological record.

(2) 後期旧石器時代の人類の居住類型の国際比較、特に東アジア圏における比較をおこなうために、研究代表者がこれまで実証的に研究を進めてきた新潟県小千谷市真人原遺跡の成果を、このプロジェクトの目的に適合するように、資料を整理することをとおして課題の追究をおこなった。

4. 研究成果

比較と発掘調査成果の突き合わせによって、①居住類型の線形飛び石的回帰モデルを考え得ること、②黒曜石、珪質頁岩の産地分析と遺跡情報を結びつけて居住類型を検討することで、東アジアにおける当該期の解釈モデルを提供できること、③東アジアの旧石器時代居住類型理解のための方法を共有すべくいっそうの国際的な共同研究の推進が展望される。以下具体的な成果を記す。

(1) まず、中国、ロシア、北米、ドイツにおいて第一線で活躍する研究者を招聘して国際シンポジウムを開き、各地の事例における居住のありかたの報告を受け、年代論とあわせて居住の類型的把握に関し、討議をおこなった。

(2) 真人原遺跡(A・B・C3地点からなる)の事例分析: 真人原遺跡は後期旧石器時代後

半の多様な尖頭器（ヤリ）を石器群の特徴とする遺跡である。

付近の信濃川は当時においてもほぼ南から北に段丘区分の「真人面」を流れていた事が解明され、遺跡付近ではこれに直行する東西方向に深い谷が刻まれ、西から東に向かって細い谷部が開口する。真人原遺跡を乗せる河岸段丘はこの谷に解析され、南北の幅は約230mである。二つの谷に北接してB地点が、南接してC地点があり、A地点はその中間に位置する。B、C地点はあたかもA地点を中心にして対称的に折り返した位置に立地する。立地の類似性ないし類型性は、たとえ想定される居住期間が短期間であったとしても、当時の集団の選地のあり方として記すに値する。B、C地点はともに現在の湧水点に最も近くに位置している。

(3) 津南から小出までの信濃川と魚野川流域に限定して石器に使われた岩石、特に珪質頁岩の分布を調査し、またA地点出土の珪質頁岩の岩石学的分析をおこなってきた。しかし、真人原遺跡を形成した集団が潜在的に利用し得た岩石の分布調査は充分ではない。したがって、具体的に解明しうるのは、遺跡から出土した石器の岩質を判定し、そこから類似の岩石の分布をたどることであった。珪質頁岩や頁岩など特定の岩石が遺跡から出土するという事は、当時の集団が剥片石器の製作に有用であるという情報を得て、何らかの形で利用した証拠であるので、すでに人間が関与して獲得した一定の有用財である。その時点ではすでに単なる岩石ではなく、石器の素材としての石材に転化しているのである。

B地点で黒曜石がまったく伴わず、珪質頁岩の重量も少なく、頁岩の占める割合が大きい点は、A、C地点と異なる石材の搬入経路な

いし移動の経路を示唆する可能性があるが直ちに明快な解答を引き出すことは容易でなく、消去法で可能性を狭めていることになると想定される。これはB地点の珪質頁岩および頁岩の岩石学的分析をまってさらに議論したい。

(4) B、A、C地点は、出土した尖頭器の器種ないし形態のレベルにおいては同時期である。さらに、石器の素材供給と両面調整石器制作が一体化した剥片剥離法が3地点全てに共通する点も、特定の剥離法としての同時期性を示している。もとよりこれが個別器種単位の編年的幅と同一である保証は無い。

問題は、そうしたことよりも一桁細かな区分における同時性をどのように把握しうるかという点である。つまり、よりミクロな時間幅の同時性、当時の集団の日常生業活動という人間生活スケールの時間幅の同時性にどう迫りうるかである。石器の接合関係がほとんど唯一の具体的解決法である。それが地点間で認められればこうしたレベルの同時性を議論できる。A、C両地点間では石器の接合関係が認められる。しかし、B地点とA地点間、B地点とC地点間には接合資料は認められない。

したがって現状では、次の3つの階層で3地点間の同時性を理解することが必要である。1) 最も時間幅のある同時性：つまり部分調整尖頭器の存在でしめされる同時性、2) A、C両地点間の接合資料でしめされる短時間幅の同時性、3) B地点は他の2地点と接合資料を共有していないことからする1)でも2)でもないある時間幅の同時性である。B地点に関しては、2つの仮定を立てざるを得ない。仮定1はA、C地点と直接接合する資料は無いが、これと同時存在と考えごく短時

間の同時性の中に含めて考える。仮定2はA-C < B < 部分調整尖頭器継続期間、と考える。

B地点から黒曜石が発見されていないこと、頁岩が多用されている二つ事実をもとに仮定を点検しても、どちらかの仮定を強く指示する条件は生まれない。むしろこの場合はどちらを排除する傾向があるかをさぐるができる程度である。二つの事実は仮定1を排除する傾向が強いと判断するが、むしろこれも決定的な判断には成り得ない。これを判断するために今後なすべき作業としては、B地点に多数を占める頁岩の岩石学的分析をおこない、これが遺跡近傍で入手しうる石材であったのか、あるいはA地点の場合と同様に遠隔地から搬入されたものかの可能性を探ることである。

そうすることで、東西南部から中部高地にわたる広域を1集団が回帰するという、遺跡間変異の説明のために提起されたモデルで真人原遺跡各地点が整合的に説明できるか、あるいはこれに、より狭い空間的広がり of 階層の回帰的モデルを付加してB地点をよりよく説明しうるかなど、多様な議論が可能となるであろう。

C地点における植物珪酸体の分析結果はIV層中部で積雪への適応性が高いクマザサ属(おもにチシマザサ節)の生育が旺盛であったとされるので、多雪期における集団の他地域への移動問題、ならびに較正年代に推定換算した場合の古気候変動との整合問題など課題はB地点のみにとどまらない。

多様な居住類型を想定しうるが、信濃川中流域のこの遺跡のありかたは、居住における線形飛び石状の回帰モデルとして理解し、その詳細を組上げる可能性を示すことができたとはいえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

① 小野 昭 2008 「中部ヨーロッパにおける旧石器時代から中石器時代への移行」『縄文時代のはじまり：愛媛県上黒岩遺跡の研究成果』単行本中の論文、9-19頁、同成社 (査読なし)

② Ono, Akira 2007 Flaked bone tools and the Middle to Upper Palaeolithic transition: A brief perspective. *Archaeology Ethnology & Anthropology of Eurasia*, 28:38-47 (査読あり)

[学会発表] (計 4 件)

① 小野 昭 「東アジアへの新人の拡散と酸素同位体ステージ3の日本列島」日本第四紀学会 2009年2月7日 首都大学東京

② Ono, Akira Upper Palaeolithic of Japanese islands: An overview. An invited lecture at the National Academy of Sciences of Ukraine, Institute of Archaeology. 12, November 2008. (招待講演、ウクライナ国立科学アカデミー考古学研究所、キエフ)

③ Ono, Akira Settlement pattern and raw material procurement systems in the Upper Palaeolithic of Japanese islands. International Symposium Commemorating the centennial anniversary of Academician A. P. Okladnikov. The current issues of Palaeolithic studies in Asia and contiguous regions. 24-30, June 2008. Denisova Cave, Altai, Russia. (オクラドニコフ生誕100周年記念国際シンポジウム、デニソワ洞窟、アルタイ、ロシア)

④ Ono, Akira First Peopling of the Japanese Islands: A view from the Palaeolithic Archaeology. 21st Pacific Science Congress. 12-18, June 2007,

Okinawa. (第21回太平洋学術会議 那覇
沖縄)

〔図書〕(計 1 件)

- ① 小野 昭『旧石器時代の日本列島と世界』
同成社 2007年刊 総277頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野 昭 (ONO, Akira)
首都大学東京 大学院人文科学研究科
教授
研究者番号 : 70000502

(2) 研究協力者

橋詰 潤 (HASHIZUME, Jun)
首都大学東京大学院人文科学研究科博士後
期課程

岩瀬 彬 (IWASE, Akira)
首都大学東京大学院人文科学研究科博士後
期課程